

平成22年度国立情報学研究所実務研修報告：
大学図書館間とNIIの連携強化のために

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 智章 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/6311

平成 22 年度国立情報学研究所実務研修報告
－大学図書館間と NII の連携強化のために

杉 山 智 章

大学図書館研究 91 号別冊
2011 年 3 月発行
(pp.44～47)

平成 22 年度国立情報学研究所実務研修報告 －大学図書館間と NII の連携強化のために

杉 山 智 章

抄録：平成 22 年度に派遣された国立情報学研究所実務研修について、研修生の立場から報告する。今回の派遣は、大学図書館間と NII との連携によって学術情報流通基盤を支える上で、静岡大学としてもその連携に貢献する目的があった。研修のプランニングは主に研修生と NII 学術コンテンツ課の協議により決定した。研修期間の 3 ヶ月間のそれぞれの月毎にテーマを定めて、NII コンテンツサービスと機関リポジトリの連携を中心に、メタデータによるシステム間連携の課題に取り組んだ。研修成果として、メタデータフォーマットの拡張案を提示した。また、研修を通して NII や他大学図書館の実態を知り、課題を解決していくためには大学図書館間や NII との更なる協同が重要であることが確認できた。

キーワード：国立情報学研究所教育研修事業、機関リポジトリ、メタデータ、静岡大学附属図書館

平成 22 年 7 月 1 日から 9 月 30 日までの 3 ヶ月間、静岡大学から派遣されて国立情報学研究所（以下「NII」）実務研修を受けたので、その報告と感想を述べたい。

1. 派遣の経緯

NII 実務研修は、NII で実施される教育研修事業のひとつである。大学等で図書館、電子計算機及びネットワーク等に従事する職員を対象とした研修であり、目的を「国立情報学研究所における実務を経験することにより、高度の学術情報システムの環境に対応しうる知識と技術を習得し、学術情報流通基盤整備の中心的役割を担う」¹⁾としている。研修期間や研修内容について、個別に NII、派遣機関、研修生の 3 者で協議して決定することが、他の研修と大きく異なっている。

実務研修の過去の記録をみると、平成 17 年度から 6 名の研修実績（うちコンテンツ系 4 名）があるが、平成 19 年度を最後に平成 21 年度までの 2 年間は、研修の実績がなかったことがわかる。この背景には、大学図書館にとって定員削減などの厳しい状況の下で、職員を研修に派遣する余力が失われてきていることがあると考えられる。静岡大学においても他大学同様に厳しい状況であるが、そのなかで今回私が実務研修に派遣されたことは、次のような理由がある。

電子ジャーナルコンソーシアムに代表されるように、図書館が単独で学術情報流通基盤を支えるのには、整備や維持に限界があるため、大学図書館同士の連携がますます重要となっている。したがって、その中核的機能の役割を果たす大学共同利用機関の NII と大学図書館とが協同した枠組みのなかで、各

大学が連携しそれぞれの役割を発揮する必要がある。静岡大学は 6 学部（人文・教育・情報・理・工・農）のいわゆる中規模大学である。大規模大学に比べれば、絶対的な業務キャパシティには限界があるが、今回の私の派遣は静岡大学附属図書館として、その連携に貢献する意欲の表れでもあった。

また、このような連携は自館の発展に寄与するためでもある。平成 20 年度に実施した静岡大学附属図書館外部評価委員会による「静岡大学附属図書館外部評価報告書」の総評では、「まず、全ての外部評価委員が高く評価しているのは、加藤館長のリーダーシップを基にして、的確な管理運営体制ができていることである。静岡大学の将来に向けた使命と役割を踏まえ、附属図書館としての運営理念を明確に打ち出して、その具現化のための目標が的確に設定されている。」²⁾という評価を受けている。最後には「今後、館長のリーダーシップがさらに活かされ、かつ、図書系職員の創意工夫を取り入れた図書館運営がなされることを期待する。」³⁾という言葉で締めくくられている。

そして、実際に平成 20 年度に公開した「静岡大学学術リポジトリ」では、研究者の要望に基づいた Web デザインの改良や著者がリポジトリに登録された論文にコメントを書くことができるといった機能付加⁴⁾を積極的に行った。また、独自に NII サービスとの連携を中心としたナビゲーション機能の充実をはかった⁵⁾。さらに、平成 22 年度にリニューアルした図書館の改修では、図書館職員が利用者や大学本部と意見交換を重ねて、「未来を拓く静岡大学：ビジョンと戦略」⁶⁾に明記された学生のキャンパスライフ充実のための図書館サービスの充実に向けて、「グループワークのできる空間」「自由に移動

できる椅子」「ホワイトボードの多数設置」「留学生同士やほかの学生と交流しやすい環境」といった学生のニーズを実現し、ラーニングコモンズ機能も取り入れた図書館の改修を行った。

そのような自館のサービスの発展に向けた取り組みのなかではっきりしたのは、図書館職員が情報科学、情報工学などの周辺領域や他機関の動向を積極的に情報収集して、現場に生かす力が求められているということである。NII 実務研修は、図書館の職場とは異なる環境で知識や企画・立案の術を習得する絶好の機会でもあるといえる。

2. 研修テーマとプランニング

今回の私の研修では、事前の協議を経て「NII コンテンツサービスと機関リポジトリの連携」を研修テーマに設定することになった。静岡大学附属図書館では、電子情報担当として図書館システムや Web サイトの構築、機関リポジトリ等の業務を担当しているので、大学図書館と NII コンテンツ系サービスの間の書誌情報（メタデータ）の現状の流れ（図 1）から更なる連携を模索することにした。あえて最初からテーマを絞り込まずに、NII の学術コンテンツ課の仕事の一端を経験しながら、自分が大学図書館で携わっている業務と最もコミットしたテーマを研修成果に設定したかった。そこで、研修期間を毎月ごとに 3 つに区切る大まかなプランを立て（表 1）、課内で検討を行っていただき了承を得た（写真 1）。

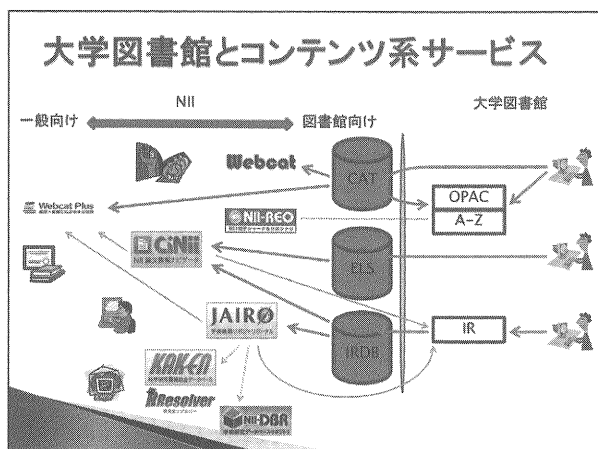


図 1 大学図書館と NII コンテンツ系サービス

表 1 研修当初のスケジュール（概略）

平成 22 年 7 月	書誌情報流通の現在を知る
8 月	書誌情報流通の課題を理解する
9 月	書誌情報流通の今後を考える



写真 1 学術コンテンツ課内検討風景

3. 研修の実際

7 月は学術コンテンツ課の事業を学びながら、テーマを絞り込む期間とした。この時期には「学術コンテンツ運営・連携本部会議」や「図書館連携作業部会 WG ミーティング」の準備に関わり、会議に陪席する機会も得た。NII と大学が連携して推進する最先端学術情報基盤（CSI）のコンテンツ系事業が、どのように意志決定されているのか、その過程を知る意義は大きかった。最初の 1 ヶ月を通して、NII がこれから推進しようとする事業・サービスと私が一番連携できる部分は、「機関リポジトリのメタデータ」であることが確認できた。そこで具体的な研修のターゲットを、NII の今後のサービス展開のための新メタデータフォーマットの作成に向けた検討に設定することとした。

8 月には、Web と学術情報の近未来を予想しながら、NII と機関リポジトリの機能を発展させるための仕組みや、それを実現するための技術を学ぶことに重点を置くことになった。とくに Linked Data の概念について、学術コンテンツサービス研究開発センターの先生のご指導を仰ぎながら学習した。Linked Data とは RDF という枠組みを用い、Web 資源を主語と述語と目的語の関係で記述して、機械可読なメタデータとして表現するものである。

また、この間には国内外のベンダーや開発業者、他機関で CSI を推進している担当者等、実に多様な方々との打ち合わせに同席させていただく機会を得た。その席上で、私が大学図書館で取り組んでいる機関リポジトリソフト DSpace の最新バージョンでの改良事案などを説明することも幾度かあった。第三者からの意見・評価をもらうことで、自分の仕事の意義を再発見することがあった。

NII 学術コンテンツサービス研究開発センターの研究者と学術コンテンツ課職員を中心に開かれるセ

ンター会議では、NII のサービス開発の最前線を知ることができ、研修成果を作成する上で多くの示唆を受けた。また「学術ポータル担当者研修」のメタデータ概論で講師をさせていただき（写真 2）、メタデータに対する自分の知識がどのようなレベルにあるか、また各機関の課題点を再確認することができた。



写真 2 ポータル担当者研修講義

最終月の 9 月は研修成果のまとめとして、機関リポジトリのメタデータについて、Linked Data の考え方を取り入れた中長期的な視点からみた次期フォーマットの検討と、現在 NII が立ち上げようとしているサービスに対応した現行フォーマット（junii2）の拡張の提案を行った（図 2）。この提案は各機関リポジトリのメタデータについて、各著者のうち機関内の研究者については著者同定のための典拠 ID を付与し、NII によるハーベスト時に各著者名と ID をひもづけして出力できるようにするための仕組みである。そうすることによって機関を越えた研究者の名寄せを行えるようになる。そして、現行フォーマットの拡張について、静岡大学学術リ

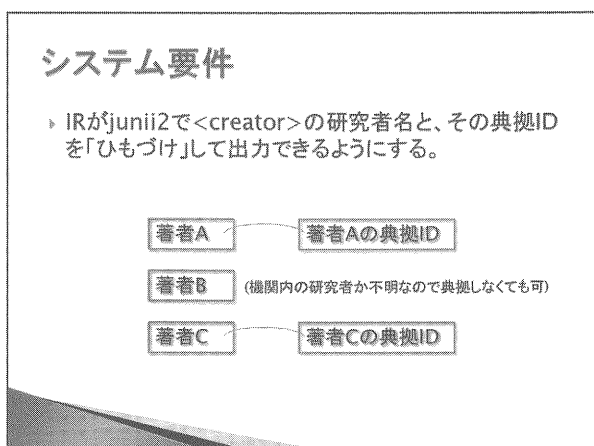


図 2 junii2 拡張のシステム要件

ポジトリを模したテスト環境を構築して、実装を試みた。

この 9 月には研修テーマについての検討・打ち合わせ、目録システム講習会講師や SPARC Japan セミナースタッフとして何度か他大学に出張する機会をいただいた。その際に大学規模によって図書館が抱えている問題が異なることを実感した。中小規模機関では目録、機関リポジトリ業務への人員の確保が切実である。ひとりが複数の業務を兼ねる場合も多く、それぞれの仕事に多くの時間を費やせないが、既存のサービスも維持していかなければならない。一方、大規模機関にとっては業務量そのものが多く、メタデータ等の管理量も大きいので、データの改修の際にかかるコストの増大に対応しなければならない。そうしたなかで全国的な共通した学術情報流通基盤を作る難しさを知った。

また、メタデータフォーマットの変更のような各大学図書館のシステムを改修する必要が発生するサービスの開発については、システムの解決に加えて、大学の担当者やシステムが変わっても持続的に運用できる仕組みを考えることも重要であることを教えられた。研修のメインテーマの成果内容については、「国立情報学研究所実務研修 過去の記録（<http://www.nii.ac.jp/hrd/ja/jitsumu/h22/index2.html>）」に最終日の発表資料と報告書が掲載されているので、そちらをご参照願いたい。

4. 成果報告と得られた経験

成果報告は新サービス開始に向けた今後の問題や課題点をまとめたものであり、あくまで 1 つの通過点に過ぎないと考えている。研修修了後も「図書館連携作業部会 WG」を中心に、学術コンテンツ課との打ち合わせの機会を設けていただき、検討に継続的に参画している。

また、研修内容以外にも、研修を通して貴重な経験となったことが多い。NII では日々変化する様々な要因のなかで自らマネジメントする仕事が多く、与えられた業務をこなすことが多い大学図書館の現場との質の違いを強く感じた。そして、大学図書館以上に NII の事業を推進する職員の削減には厳しいものがあることも知った。

職員が海外に出張したり、海外からの来訪者に対応したりする機会が多いことにも驚いた。学術情報に国境がないように、学術情報流通基盤の事業・サービスを展開していくためには、常に海外の動向にも目を向けなければならない。また、外国もメタデータにおける研究者の名寄せ問題では、どうやっ

てIDを普及させていくのかといった日本と同様の課題を抱えているのだということもわかった。大学図書館がこのような課題に取り組み、図書館機能を維持発展させるには、機関を超えた図書館職員同士の相互の連携・協力、そして国内の学術コンテンツ事業・サービスの核となるNIIと大学図書館との更なる協同により、日本の学術情報流通基盤をしっかりと支えることが極めて重要であることを確認できた研修であった。

余談ではあるが、東京に勤務することで、業務時間以外に図書館に関連するワークショップなどに個人的に参加することもできた。これは地方に在住しては難しいことである。研修内容は自分にとってハードであったが、精神的な辛さは感じなかった。これはひとえに、NIIの方々が研修生の私の研修テーマを共有し、所内でいっしょに取り組む環境を提供くださったおかげであると考えている。

最後になるが、研修を受け入れてくださったNII学術基盤推進部、特に学術コンテンツ課のみなさま、学術コンテンツサービス研究開発センターの研究者のみなさま、そして実務研修生として派遣することを決定してくださった静岡大学の加藤図書館長をはじめ、期間中に業務を補ってくれた静岡大学附属図書館のみなさんに改めて感謝申し上げたい。

注・参考文献

- 1) 国立情報学研究所. “国立情報学研究所実務研修”. <http://www.nii.ac.jp/hrd/ja/jitsumu/index.html>, (参照 2011-03-03).
- 2) 3) 静岡大学附属図書館. “静岡大学附属図書館外部評価報告書”. 平成 20 年 12 月 http://www.lib.shizuoka.ac.jp/koho/hyoka/tosyokan_ziko_hyouka_houkoku_2008c.pdf, (参照 2011-03-03).
- 4) 杉山智章. “IR から GeNii へのリンクで広がる学術情報ナビゲーション”. 平成 19 年度 CSI 委託事業報告交流会 (コンテンツ系). 平成 20 年 6 月 12・13 日, http://www.nii.ac.jp/irp/event/2008/debrief/pdf/4-02_shizuokadai.pdf, (参照 2011-04-07).
- 5) 杉山智章. “リポジトリを核とする学術情報ナビゲート”. 第 8 回東海北陸地区 CSI 事業報告会 (学術機関リポジトリの最前線). 平成 20 年 12 月 1 日, <http://hdl.handle.net/2237/10687>, (参照 2011-04-07).
- 6) 静岡大学. “未来を拓く静岡大学：ビジョンと戦略”. 平成 20 年 3 月, http://www.shizuoka.ac.jp/outline/vision/pdf/vision_policy.pdf, (参照 2011-04-07).

< 2011.3.8 受理 すぎやま ともあき 静岡大学附属図書館電子情報担当 >

Tomoaki SUGIYAMA

NII OJT Report in 2010 : To enhance cooperation between university libraries and NII

Abstract : The author reports on his experiences at the “on the job” training session offered by the National Institute for Informatics (NII) in 2010. He went with the goal of learning to provide scholarly information infrastructure through cooperation not only between the library and NII but also with Shizuoka University. Most of the planning for the workshop was done collaboratively between the participants and NII’s Infrastructure Planning Department. They set a theme for each day of the three month period of training such as focusing on NII’s contents service and collaborating with institutional repositories, but also including issues relating to creating systems that link to metadata.

Keywords : National Institute for Informatics (NII) Education and Training Program / institutional repositories / metadata / Shizuoka University Library